



ミルクプリンセス

ずっとフガフガにゆ〜トピア

小説 神崎美宙 挿絵 大空樹

立ち読み版



登場人物紹介

Characters



一生、絶対に
離してあげませんから、
覚悟しなさいっ！



私をお嫁さんにしてくだわう……

ローズマリー＝
アンジェリカ＝
ガトーマリティエ

ステラと同じく、アキラの手で助けられたお姫様。ステラの妹で、アキラに感謝しつつも高飛車な性格のせいで素直になれない。Gカップ。

ステラ＝リリイ＝
ガトーマリティエ

敵国に囚われていたところをアキラに助けってもらったお姫様。物静かで礼儀正しい性格で、助けてくれたアキラに恋心を抱いている。Cカップ。



わたしの花嫁姿は
アキラ様のものです

シェリス

クリスティナに仕えるメイド長。仕事のできるクールビューティ。英雄となったアキラに対して、身体を使って奉仕する。Dカップ。

アキラ=リョウ

軍事大国ソドムで牢屋番をしていた少年。現在はクレーージュに亡命し、王宮で暮らしている。



わらわも永遠にアキラを
愛することを誓います

クリスティナ= トレイジア= ガトーマリティエ

ステラとローズマリーの母親にして、クレーージュ王国を治める女王。母性的な女性で、娘を助けてくれたアキラを自慢の爆乳からあふれるミルクでもてなす。Iカップ。

序章	
第一章	メイドさんとお勉強中
第二章	甘い夜
第三章	お姫様のご奉仕 ステラの場合
第四章	お姫様のご奉仕 ローズマリーの場合
第五章	晩餐会
第六章	ずっとラブラブにゆくとピア
終章	
	249
	194
	150
	109
	074
	040
	013
	007

(何だか、眠たくなってきた……)

膝枕で耳かきしてもらっていると、気持ちよすぎてまぶたがだんだんと重たくなってしまふ。この幸せな気分^に身を委ねたいという誘惑と、淑女の太股の感触を味わっていたという欲求が頭の中で交錯する。

「そういえば、色々^と頑張っているみたいね？ シェリスから聞きましたよ……」

あれこれ考えるのも億劫^{おっくう}になりウトウトしていると、大人の色香ムンムンの爆乳越しにクリステイナの声が聞こえてきた。

「……えっ、あ、それは、その……少しでもクリステイナ様や、ステラ様たちに相応しい男になりたいと思つて……それで、はい……」

別に口止めをしていたわけではないが、あまり威張れることでもないのです。みんなには黙つていたため、改めて説明すると少し恥ずかしい。

歯切れの悪い答えだったが女王は少年の言葉を聞くと、耳かきをやめて優しく頭を撫でてくれた。

「まあ、殊勝な心がけですね。でもそんなに肩肘張らなくてもいいのですよ。アキラはアキラのまま……そんなアナタがわらわは大好きですから……」

「あ、ありがとうございます……」

きつと今クリステイナは慈母のような笑顔を浮かべているのだろう。ただ上を向いても巨大な果実が視線を覆い尽くし、淑女の顔を見ることはできない。

美女の優しい笑顔を想像しながら魅惑の爆乳を下から凝視している間も、女王は髪をすくように頭を撫でてくれる。

「ふふ、でも頑張り屋さんのいい子には、何かご褒美をあげないといけないわね……」
もちろん何か見返りを求めて勉強を始めたわけではない。それでもこうやって褒めてもらえると嬉しいし、ご褒美という単語に反応して心臓の音が一気に大きくなった。

先ほどまで感じていた眠気など吹き飛び、甘い妄想が脳内を駆け巡る。

「そんな……ご褒美だなんて……僕はそういうつもりじゃ……」

一応平静を装ってみるが、淑女は何でもお見通しですよと言いたげに微笑む。

「分かっていますよ。わらわがアキラを褒めてあげたいの……だから甘やかさせてちょうだい……ね？」

「は、はい……」

そしてこの子供を論ずる母親のような口調で語りかけられると、もう少年は何も言い返せなかった。

クレージュ王国に来るまでほとんど女性と接する機会がなくあまり耐性のないアキラだが、この母性と妖艶さを兼ね揃えた女王様には特に弱い。大陸一の美女と噂される彼女の声はとろけるように甘く、聞いているだけで歳若い少年など簡単に骨抜きにされてしまう。「うふふ……いい子ですね……それではご褒美にアキラの大好きなわらわのおっぱいを飲ませてあげましょうね……」

麗しい女王は両手をドレスの胸元へと伸ばすと、ゆっくりと左右にずらしていった。

大胆に胸の谷間を露出していた衣服はあつという間にはだけてしまい、ミルクを溶かし込んだかのように白い乳房がぷるんとまろび出してくる。

「あ、ああ……クリステイナ様のおっぱい……大きくてすごく綺麗です……」

「まあ、ありがとう……アキラに喜んでもらえて嬉しいわ……ほら、見ているだけじゃなくて、いっぱい味わっていいのよ……」

嬉しそうに目を細めながら淑女は自慢の爆乳を持ち上げるように中央に寄せて、少年の目の前に差し出した。ただでさえ迫力のある大きな乳房がさらに深い肉の谷間を作り、ぷっくりと膨らんだ乳輪と尖った乳首がまるでしゃぶって欲しいと言わんばかりに自己主張をしている。

「……はいっ！ では……い、いただきますっ……」

美味しそうなおっぱいを見せ付けられた少年の理性は完全に崩壊し、頭の中は女王のミルクおっぱいのことδειっぱいになっていた。

このままでは乳首に届かないので、すぐに少し上体を起こして上に仰け反るようにして淑女の太股の上からソファの肘掛けへと頭の位置を移動する。

「ええ、わらわのおっぱいはアキラのものですから……好きなだけ召し上がれ……」

クリステイナも慈愛に満ちた笑みを浮かべながら少年の首の下に腕を回し、抱きかかえるようにして頭を支えてくれた。ちょうど赤ん坊に授乳するような体勢になり、少し恥ず

かしかつたが美味しいミルクとおっぱいの前では些細なことである。

アキラは砂漠でオアシスを見つけた旅人のように夢中で女王の乳房に吸い付いた。

「ちゅ、ちゅうっ……チュ、ちゅぶ、んっ……ちゅるるっ……」

「あはぁんっ、あぁっ……そうよ、いっぱい飲んでちょうだいっ……」

淑女のおっぱいは相変わらずどうやってこの綺麗な形を維持していられるのか不思議なくらい柔らかく、それでいて先端のピンク色の尖りだけはコリコリとしていてしゃぶりがいがある。

乳輪ごと口に含み舌で乳首を転がすように愛撫をすると、クリステイナは恍惚の表情を浮かべて甘い声を上げながら身体を震わせた。

「ああ、んんっ……うふふ、こうしていると本当にアキラがわらわの赤ちゃんになったみたいで、とっても可愛いわ……」

大陸一の美女は必死に乳房に吸い付く少年を愛しげに見つめながらうっとりとしたため息を漏らしている。女王もおっぱいを吸われる行為自体を楽しんでいるようだ。

毎日のようにミルクを飲ませてもらっていてそれを知っているアキラは調子に乗って最高級の乳房を手で揉みながら乳首を吸い続ける。

「んっ……ああ、アキラ……ミルクが出そうになってきたの……美味しいミルクをたくさん飲ませてあげますからね……あ、ああ、はぁあぁーんっ！」

極上の柔らかさを誇る乳肉がだんだんと張ってきて、ツンと硬くなった乳首から甘い味

が滲み始めたと思つたら、クリステイナが鼻にかかった甘い声を上げながらギュッと抱きついできた。

びゅるるっ！　びゅ、ぷしゅ……びゅーっ！　びゅ、びゅ、びゅーっ！

その瞬間に口の中に生温かくて甘い独特の味が広がり、しゃぶりついていない反対の乳房からは勢いよく放物線を描くようにミルクが溢れる。まさにミルクタンクと呼ぶに相応しいおっぱいはスイッチが入ってしまったかのように次々に白い乳液を飛び散らせ、淑女は恍惚とした表情を浮かべていた。

「むぐっ……こんなにいっぱい……んっ、ゴクゴク……」

あまりに大量のミルクが口の中に流し込まれたので慌てて飲み干すが、飲んでも飲んでもクリステイナの爆乳からはミルクが溢れてくる。

「……はぁん……ほら、アキラ、こっちのおっぱいも吸ってちょうだい……」

女王は熱っぽい吐息を漏らしながら上半身を捻り、噴き出したミルクが垂れて下乳が濡れている反対の乳房を差し出してきた。

「はい、いただきます……クリステイナ様のミルク美味しいです……」

少年はミルクが滴り落ちてできた白い筋をなぞるように乳肌を下から乳首に向かって舌を這わせ、温かくてスベスベの乳肌を舐めまくる。乳首から直接吸うのとは違い、じんわりと汗ばんだ肌のおかげで少し甘酸っぱい味がした。

「あんっ……アキラに飲んでもらいたくて、どんどん出てきてしまうわ……」

夢中になつて乳首にしゃぶりつきミルクを飲み干していくが、女王の爆乳からは止め処なく新たなミルクが溢れてくる。少年が交互に吸い付くだけでは射乳の勢いに追いつけず、常に反対の乳房がミルクで濡れている状態だった。

「あらあら、こんなに溢れてしまつて……ンちゅっ」

見かねた様子のクリスティナは片方の乳房を持ち上げ、首を伸ばすように舌を伸ばして自らミルクを舐め取る。彼女ほどのバストサイズともなると自分で自分のおっぱいの先端に舌先が届くらしく、その大胆な行為に少年の心は高鳴った。

「す、すごいですね……自分で舐められるんですね……」

「ええ、そうね……でもすぐくなんてないわ……ほら、簡単でしょ……」

アキラが驚いたように目を丸くしていたのがおかしかつたのか、淑女は悪戯っぽく笑いながらも一度ミルクが滴る乳首を舐めてみせる。

大したことではないと軽く言っているがやはり誰にでもできることではなく、少年は女王の乳首舐めを食い入るように見つめた。

「ふふ、そんなに気に入つたなら……一緒に舐めっこしましょうか……?」

そう言うときクリスティナは自分で舐めていたおっぱいをこちらへと向ける。ミルクと美女の唾液まみれになり濡れ光る乳首が目の前に差し出され、少年は興奮のあまり思わず唾を飲み込んだ。

「は、はい！ ぜひ、お願いします……」



もちろん女王の申し出を断る理由などない。アキラはすぐさま乳房の反対側にしゃぶりをした。

「あ、あんっ……ああ、何だか変な感じがするわ……んはあ、ちゅうっ……」

勃起した乳首を挟んでぷっくりと膨らんだ乳輪の上を二枚の舌が這い回る。

お互いの舌先を絡め合うようにして乳首に滲んだミルクを舐め取っていると、クリステイナは肉感的な唇から熱っぽく甘い吐息を吐きながら身体を震わせた。

「……はあ、んふう……胸がジンジン痺れてきて、熱くなってきたわ……ふふ、アキラ……こっちも舐めてちょうだい……」

ダラダラとミルクを溢れさせていた反対の乳房も言われたように女王と二人で舐めて綺麗にする。硬く尖った乳首はミルクだけでなく、甘露のような淑女の唾液の味がしてさらに興奮は高まる一方だった。

「ちゅ、ちゅる……クリステイナ様のおっぱい最高です……」

「ふふ、アキラの舌も美味しいですよ……んちゅ、ちゅば……」

勢いあまって乳首だけでなく美女の舌先まで舐めてしまったが、彼女はお返しとばかりに少年の舌に吸い付いてくる。

ミルク味の軟体物が絡みつき硬い乳首とは違う感触が過敏な舌先を刺激し、男女は夢中になってお互いの唇を吸り合った。

（ああ……クリステイナ様と一緒におっぱいしゃぶりながらキスだなんて……こんなエ

ツチすぎるっ……)

ついさつきまでどこか懐かしさを感じていた母性的な美女の甘い香りは濃厚な大人の色気となつて少年を包み込む。年上の美女の温かい体温に抱かれ、柔らかいおっぱいとミルクの甘い味がする情熱的な接吻が理性を溶かしていく。

「ちゅ、んっ……可愛いわらわのアクラ……もつと舌を絡めてちょうだい……」

クリステイナも興奮してきたのか、色っぽい鼻息を漏らしながらキスに耽っていた。

もう乳首を舐めるといふよりは少年の舌に自分の舌を絡ませ、ミルクと唾液を流し込むように唇に吸い付いてくる

「……ふはあ、んっ……こんな激しいキスされたら、僕っ……」

アクラもそれに応えるように上体を起こし、ますます激しいキスを交わしながら両手でミルクおっぱいを揉み搾った。もうズボンの中はパンパンに膨らみ、もつと快感を貪るところしか考えられなくなる。

「こんなキスをされたらどうなってしまうのかしら？ ふふ、教えてちょうだい……」

「……クリステイナ様とセックスしたくて、我慢ができなくなっています……」

「まあ、大変……でも我慢なんてしないでいいのですよ……わらわもアクラが欲しくて堪らないわ……」

期待のこもった視線を向けられた女王は嬉しそうに微笑み、少年の頭を愛しげに撫でながら頷いた。

少年の呼びかけにも答えず、王女はズンズンと歩を進めて室内からは死角になっている柱の陰へとやってきた。そして何も分からず困った顔をしているアキラの肩に両腕を突き立ててくる。

「えっ……ま、まさか……」

背中を壁に押し付けられてしまい、逃げ場を失ったことに気づくがもう遅かった。

目の前に潤んだ瞳をツリ上げて拗ねたように唇を尖らせているローズマリーの顔が迫ってくる。

「そうですわ、今すぐわたくしを……だ、抱きなさい……」

その大人びた顔立ちで子供っぽい仕草を見せる高飛車王女の可愛さに思わず見とれてみると、王女は甘えるように少年の胸元を掴んで身体を密着させてきた。

二人の間に挟まれてギュッと押しつぶされた爆乳の誘惑に一瞬負けそうになる。もちろん可愛い恋人の願いを叶えてあげたいが、室内はまだ晩餐会の真っ最中でいつバルコニーに人が来るか分からず踏ん切りがつかない。

「こ、こんな場所ですか？　せめてどこか部屋に行った方が……」

何とか理性を保ち妹姫を引き離そうとするが、ローズマリーは駄々っ子のように腕にしがみつき首を横に振った。

「今すぐにアキラに抱いて欲しいんですの……ほら、わたくしの胸……アキラのせいでもキドキしてるでしょう……」

まだ迷っている少年の手を取ると、ローズマリーは自分の乳房へと導く。手のひらに収まりきらない爆乳のずっしりとした揉み応えに心が躍った。

無意識のうちに五本の指は動き、ついその感触を味わってしまふ。

「……あんっ！ 反対も……触っていいですわよ……」

言われるがままに少年は両手でお姫様のおっぱいを揉み続ける。どんなに強く指を食い込ませても弾き返してくる重量感たっぷりの乳肉は、いくら触っていても飽きがこない極上の揉み心地だ。

誰かに見られたらどうしようという不安は微かに残っていたが、おっぱいのことで頭はいっばいになりその柔らかい感触から手が離せない。

「ふふん、やっぱりアキラはわたくしの胸に弱いですわね……ん、はあ……お姉様より大きくて素敵ですよ……?」

得意げに胸を張るローズマリーだが声は節々に熱を帯び、さつきまでツリ上がっていた目尻がトロンと下がり始めていた。

「そ、それは……どっちも素敵ですよ……」

ステラの美乳がローズマリーより小さいからと言って魅力が劣っているとは思わないが、少年を今まさに虜にしているのは目の前の爆乳だ。

下から持ち上げるようにして弾ませたり、ギュッと中央に寄せて谷間を深くしてみたり、美しく挑発的に姿を変える高飛車姫のおっぱいに視線は釘付けになる。

「はんっ……また、そんなことを言っ……先ほどから嬉しそうにわたくしの胸をずっと揉んでいるのは誰ですの……?」

「うう、僕ですけど……」

「そうですわよね。ふふ、そんなにわたくしの胸が好きなら……ミルク、飲ませてあげますわ……」

アキラがローズマリー様の乳房に夢中になっていることを素直に認めると、本当に分かります。アキラがローズマリー様の乳房に夢中になっていることを素直に認めると、本当に分かります。アキラがローズマリー様の乳房に夢中になっていることを素直に認めると、本当に分かります。

派手な赤い布地がズリ下ろされ、雪のように白い乳肌が露わになった。バルコニーとは言え野外でお姫様の生おっぱいを拝むという刺激的なシチュエーションに、心臓の鼓動は自然と速くなる。

「ああ、ローズマリー様のおっぱい……とても綺麗です……」

王女の乳房は窓から漏れてくる部屋の明かりと月の光に照らし出され、暗がりの中もはつきりとその美しい形と肌の白さは目視できた。

そして邪魔なブラジャーもなくなり、ついに小さめの乳首まで全てが少年の視線に晒される。

「と、当然ですわ……はぁんっ……胸なら、誰にも負けませんわ……」

自分のセックスシンボルを愛する少年に褒められたローズマリーは自慢げに乳房を抱え、自己主張を始めている薄ピンク色の尖りを差し出してきた。

ドレスの上からでもその大きさは十分に感じていたが、やはり直接触れると手のひらに感じる採み応えが全然違う。肌は手に吸い付くようにモチモチで、その柔らかい弾力に感動すら覚えた。

「はあ、んんっ……ミルクが出そう、になつてきましたわ……」

身体を密着させたままアキラにおっぱいを採み回され、ローズマリーは小さな喘ぎ声を漏らす。

乳輪はぷつくりと膨らみ、乳首はさらに硬くコリコリになっていた。しかも指先で摘むと、先端から温かいミルクが滲んでくる。

「本当ですね……ミルク出てきました……」

じわじわと白い粒は乳首の先で大きくなり、雫となつて乳房から滴り落ちていった。

その光景を見てみると自然に喉が鳴る。少年はすぐに乳肌を伝うミルクを舌で舐め取りながら乳首にしゃぶりついた。

乳輪ごと口を含み、チュウチュウと吸い上げると口内いっぱい甘い味が広がる。

「ふう、んはあ……す、好きなだけ……飲んでいいですわよ……んっ、これはアキラだけのミルクなんですから……」

「ローズマリー様……」

乳房を吸われミルクを搾られる快感に身悶えしながら王女は幸せそうに呟く。

あのローズマリーの口からこんな甘い言葉が聞けるなんて、出会った当初は夢にも思わ

なかつた。それだけにこうやって素直に愛情表現してくれるのが嬉しくて堪らず、少年は乳房を揉みながら交互にミルクを吸いまくる。

「とつても美味しいです……ずっと飲んでたいくらいです……」

「……あん！　そ、それはよかったですわ……」

飲み干しても飲み干しても溢れてくるローズマリーのロイヤルミルク。

世界中でこの味を楽しむことができるのは自分だけ——そう思うと自然に興奮で胸が熱くなり、おっぱいとミルクのこと以外考えられなくなってしまう。

「ね、ねえ……アキラ……」

言われた通り好きだけ乳房の感触とミルクを味わっていると、王女は何か言いたげに内股をモジモジと擦り合わせながら赤く染まった顔で見つめてきた。

少年は乳首にしゃぶりつきながら視線だけ動かしてお姫様の様子を窺う。

「胸もいいですけど……その……わたくし、もう我慢できないんですのっ……」

ローズマリーは切なげに声を震わせた。ずっと胸を揉まれ、乳首を舌で責められ、ミルクを搾られていたせいかわ女の頬はほのかに上気している。

その潤んだ瞳を見れば彼女が何を懇願しているのかすぐに分かった。

「……はいっ！　僕も我慢できませんっ！」

少年の方もズボンの股間は膨らみ準備万端。先ほどステラに一度抜いてもらったというのに我ながら本当に無節操な逸物である。

しかし大好きなお姫様からこんな風に可愛くエッチなおねだりをされては我慢なんてできるはずがない。王女の乳房から手を離れたアキラは、興奮のあまり野外だということも忘れてズボンごとパンツを脱ぎ捨てて勃起ペニスを取り出した。

「アキラったら……もうこんな……」

いきり勃つ逸物を見たローズマリーは月明かりの薄暗い中でもはつきりと分かるほどにカツと頬を赤らめる。

「だってローズマリー様が魅力的すぎるんです……」

「そ、それなら、仕方ありませんわね……ほら、こうしたら挿入れやすいでしょう？」

強がって何でもないと表情を浮かべているが、期待に満ちた視線で少年の股間を見つめていた高飛車姫はくると身体を反転させてこちらに背中を向けた。

確かに立ったままセックスするのならバックからの方が簡単に挿入できる。そんな心遣いに胸を躍らせながら王女のスカートに手を伸ばした。

「あ、あんっ……恥ずかしいですわ……」

ドレスをまくり上げると真っ赤なショーツに包まれたヒップが露わになり、強気なお姫様もさすがに恥ずかしそうに腰を震わせる。

これまた派手なデザインの下着は極端に布が小さく、大人顔負けのバストに比べると小ぶりでキュッと引き締まったお尻がほとんど丸見えだ。しかもクロッチの部分を中指の腹でなぞると、細い布地はじつとりと湿っており指先に吸い付いてくる。

「すぐ濡れてます……」

「ちよつと、あ、ああんっ……そんなところ、触らなくていいですから……」

びしょ濡れ状態の股間を弄られたローズマリーは困ったような表情を浮かべながら肩越しに熱っぽい視線を向けてきた。口ではそんなことを言っているが、薄布はますます蜜で湿りワレメの形を指で確認できるほどに女淫にピタリと張り付いている。

これだけヨダレを垂らしていれば愛撫なんて必要ないだろう。ショーツの股布に指を引っかけて横にずらして逸物を押し付けた。

「……あんっ」

しかし王女が直立したままではどうも角度が悪くて上手く挿入らない。

「あの、ローズマリー様……もう少しお尻を突き出してください」

「こ、これ以上わたくしにはしたくない格好をしろと言うんですの？ ううっ……し、仕方ありませんわね……」

羞恥で顔をしかめるローズマリーだったが、素直に壁に手を突き両足を開いて形のいいヒップを突き出した。お姫様という高貴な身分の彼女からすると、今までやったことがないような屈辱的なポーズだろう。しかもいつ誰に見られるか分からない野外で。

きつと恥ずかしくて堪らないはずなのに、王女は挿入が待ちきれないとばかりにヒップを揺らめかせている。

「ローズマリー様っ……大好きですっ！」

無言のおねだりに応えるためアキラは再び逸物を淫裂にあてがう。

そして一気に奥へと押し込んだ。

「ああんっ！」

いきなり膣奥を貫かれた高飛車姫はその衝撃で金髪の巻き毛を揺らし、大きく背中を仰け反らせて喘ぐ。

同時に柔らかい膣壁が侵入してきた逸物を包み込み、優しく締め上げる。

（うあっ、ローズマリー様の膣が……き、気持ちいいっ……）

胸を揉まれてミルクを搾られているうちに感じていたらしく、王女の膣内はすでに大量に分泌された愛液でぬかるみ、膣粘膜はヤケドしそうなほど熱を帯びていた。

細腰を両手で掴み軽く腰を振ると肉ヒダと逸物が擦れてグチュグチュと音が鳴り、股間に心地いい痺れが広がる。

「はあんっ……こ、こんな格好で……セックスだなんて、恥ずかしすぎますわっ……」

イヤイヤと首を振っているが、ローズマリーも甘い声を漏らしていた。

彼女も感じていることを察して腰使いを緩めることなく後ろから突き上げると、その度にドレスからむき出しになって爆乳が勢いよく揺れ踊る。

（おお、めちやくちゃ揺れてるっ……）

しかも膣内を勃起ペニスでかき回されているお姫様のおっぱいからはミルクが溢れてきて、床にポタポタと滴り落ちていた。

その扇情的な光景がまた少年の興奮に火をつける。

膣壁とペニスが激しく摩擦を繰り返し、とろけるように心地いい膣奥に吸い込まれるように自然と王女のヒップに股間を打ち付ける速度が上がっていく。

「あ、あつ……ああ、ンああつ……ああつ！」

その激しい腰突きを受けたローズマリーは声にならない声を上げ、結合部からダラダラと蜜を溢れさせる。しかも刺激が強すぎるのか両足を震わせながら壁にしがみつき、何とか体勢を保っている状態だった。

あの高飛車姫がエッチの時だけ見せる弱々しい姿に男心は刺激され、倒れそうになっている王女の腰を掴んで固定してさらに亀頭を膣奥に突き立てる。

「奥に当たって……はあん、あ、はあつ……は、激しすぎますわっ……」

力任せに膣内を突きまくられたローズマリーはがっくりと頭を垂れ、あられもない声で喘ぎながらされるがままになっていた。

「……ローズマリー様、すごく気持ちいいです！」

熱を持った柔らかい肉壁が絡みつき、勃起ペニスを刺激する。そのおかげでまたしても性欲が暴走し、股間の奥から湧き上がる熱い衝動に全身は翻弄され始めた。

「はあつ、ああつ、わたくしも気持ちいい、ですわっ！」

快感を訴えるとローズマリーも必死に首を回して後ろを振り返りながら少年の言葉に答えてくれる。

そんな健気な姿に胸は熱くなり、両手で後ろからすくい上げるように乳房を鷲づかみにして華奢な身体を抱き寄せた。そして少々強引に唇を奪う。

「……ひゃあん！ アキラあ……んう、ちゅっ！」

抱き起こされたお姫様は腕を突っ張って身体を支えながらキスを受け止めた。それだけでなくすぐに口を開き、互いの唾液を貪るように舌同士を絡ませ合う。

（ああっ……もう、気持ちよすぎて出そうになってきたっ……）

接吻に耽りながら腰を振って逸物をねじ込み、そして両手は爆乳を揉みしだき全身を使って王女の身体を味わい尽くす。

揺れ踊るおっぱいは握力を込めれば込めるほどに乳首からミルクが溢れ、乳肉は指先を押し返してくる。立ちバックという野生的な体位が男女の興奮をいつも以上に刺激し、二人は絶頂の階段を駆け上っていく。

「ぷはあっ！ あはあんっ、わたくしったら……こ、こんなにミルクをまき散らしてしまつて……はしたないっ……ンあ、恥ずかしいですわっ……」

「はしたなくなんてないです！ もっと感じてくださいっ！」

ゆさゆさと揺れる爆乳に十指を食い込ませ、さらに腰を強く打ち付けた。相変わらず何の工夫もない直線的な責めだが、膣壁は嬉し泣きするかのように愛液を溢れさせながらペニスにしゃぶりついてくる。

グチュッ！ ズツチュ！ グチュッ！ ズツチュ！

「もう十分感じていますわ！ わたくし、イ、イキそうなんですものっ……」
「本当ですか？ ぼ、僕も、もうっ……出そうです！」

限界が近いことを悟った少年は、ここが野外だということも忘れて猛然と腰を振るった。ヌメる肉ヒダと淫摩擦を起こし、股間がとろけるかと思うほどの快感が広がる。

「い、いいですわよ！ わたくしの中につ……ああ、わたくしもイクううッ!!」

射精が近いことを本能的に察したのか、王女の子宮は愛しい少年の精を受け止めようと下がってきた。ただでさえ狭い膣内がさらに窮屈になり、痛いくらいに勃起したペニスの子宮口とぶつかり合う。

「あああああああっ！ 出るっ、出ます——っ!!」

ついに込み上げてくる射精欲を抑えきれなくなり、思いつきり男根を王女の膣奥にねじ込んだ。

ドビュビュツ！ ビュルンツ、ビュビュツ、ビュブブウウウウ〜〜ツツ!!

大量の精液が尿道を押し広げながら駆け上がり子宮口を襲う。

「ひいいううん、あはあああっ……な、中に出ていますわあああっ!!」

少年が達するのと同時に膣内は激しく痙攣を起こして射精中の逸物をギュウギュウと締め付けた。

膣口からはぷしゅつと潮が噴き出し、乳房は派手にミルクをまき散らしている。

ローズマリーと快感を共有し一緒に絶頂に達したという満足感に浸りながら、後から後



から湧き上がってくる熱い子種を彼女の膣内に流し込み続けた。

「はあ、はあ……頭が真っ白になってしまいましたわ……」

小刻みに蠢く膣壁は最後の一滴まで白濁液を搾り取ろうと竿に絡みつく。

二人は結合を解くこともせず、しばらく荒い呼吸を繰り返しながらじっとしていた。心地よい夜風が火照った身体を優しく撫でてくれる。

「もう、アキラったら……激しくすぎですわ……」

まだ全身に力が入らない様子の王女だったが上半身を捻り、片腕を首に回して顔を近づけてきた。

「すみません、つい夢中になってしまつて……ダメ、でしたか？」

「……ダメなはずありませんわ……ちゅっ、んっ……ああ、わたくしの中がアキラの子種で満たされているのが分かりますわ……」

うっとりとした表情を浮かべながらキスをねだってくるローズマリー。その仕草が可愛すぎてアキラも濃厚な接吻で愛情を表現する。

「そろそろ晚餐会に戻らないとまずいんじゃないですかね？」

「別にいいですわよ。退屈なパーティに出るより、こうやってアキラと二人でいる方がずっと楽しいですわ……」

絶頂の余韻なのか素直に甘えてくる高飛車姫は不自然な体勢で抱き合つたまま離れようとしない。

「じゃあ、ローズマリー様から……すぐにステラ様にも挿入れますから、少し待ってください……」

お願いをする時はキスも一緒に。四人もお嫁さんがいる幸せ者のアキラが覚えた処世術である。

「ふふ、ステラもマリーもラブラブで羨ましいわ……」

イチヤつく子供たちを見つめながらクリステイナが羨ましそうに呟く。

「ちゅっ……もう、アキラさんったら……さつきから思っていましたけど、呼び方……」

「あ、そうでした……ス、ステラ……待っててください」

もう一度キスをやり直すと、姉姫は黙って腕を離してくれた。

「……マリー、挿入れますね……」

先ほどの失敗を生かし今度は思い切ってローズマリーを愛称で呼び、太股の間に身体を滑り込ませる。

「ええ、いつでもいいですわよ……」

恥ずかしそうに目を伏せる妹姫だったが、いつもはキュッと引き締まっている口元が緩みっ放しだった。OKをもらうとアキラは王女のめくれ上がったスカートの中に両手を差し込み、ショーツを剥ぎ取る。

（あ、ローズマリーさ……マリーったらもう濡れてる……）

ミルク交換のおかげか、お姫様の女淫はすでに蜜で潤んでいた。

こちら先汁を滴らせている勃起ペニスの先端を大淫唇に押し当て、ゆつくりと腰を前へと突き出していく。

ズブツッ！ ズニュウウウ〜ッ！！

「あ、ああん！ アキラが挿入つてきますわっ……」

いくら濡れていたとは言えろくに前戯もせずに挿入されたローズマリーは背中を仰げ反らせながら甘い声を上げた。

「くうっ……マリーの中が絡みついてきて……」

早熟した膣壁の柔らかい肉ヒダが、待ちわびていたと言わんばかりに一斉にペニスにしゃぶりついてくる。その包み込むような感触があまりに気持ちよすぎて、膣圧の抵抗はそれほど強くないのに腰の動きが止まってしまう。

下手したら今すぐにも射精してしまいそうになるくらい快感だ。一度腰を引こうとするが妹姫の両足ががっちり腰に回り身体をロックされる。

「はあ、あふうっ……こ、このまま奥まできて……欲しいんです……」

少年の腕を手繰り寄せ、ギョツと握り締めながら嘆願するように上目遣いに見つめてくるローズマリー。普段の高飛車な態度とギャップがありすぎて、その可愛いお願いを無視なんてできない。

「わ、分かりました……」

歯を食いしばってそのまま挿入を続行する。肉竿はどんどん膣内に吞み込まれていき、

ついに根元まで大量の愛液でぬかるむ膣壁に包み込まれた。

「アキラあ、んッ……奥に、当たってますわっ……わたくしの中がアキラで満たされてますの……」

早くも普段聞いたことのないような声で喘ぐ高飛車姫。しかしそんな妹の姿を見て待ちきれなくなつたのかステラが腕を引つ張ってくる。

「アキラさん、マリーにばかりズルいです……私も可愛がってください……」

「お、お姉様……今はわたくしの順番なので、邪魔しないで欲しいですわ……」

これは自分のものだとアピールするように必死に抱きついてくるローズマリーがとても可愛かったが、確かに一人相手にしただけで果てるわけにはいかない。

「すみません、また順番に挿入れますので……少し我慢してください……」

「……むう、仕方ありませんわね……」

すぐには頷かなかつたがさすがにこの状況で本当にアキラを独占なんてできないと分かっているのか、渋々といった感じで両足を開き下半身を解放してくれた。

名残惜しくはあつたが妹姫の膣からペニスを引き抜こうとする。が、本人の意思を反映しているのか柔らかい肉壁が逃すまいと竿に絡みつく。

「くっ……すみません、すぐに戻ってきますので……」

腰を動かしていくにつれて逸物がトロトロの膣粘膜と擦れ、気を抜けば射精してしまいそうなほど気持ちいい。そんなローズマリーの膣から何とか男根を引き抜き、キスをして

からステラの方へと移動する。

「ああ、アキラさん……私も待ちきれないんです……」

あの清楚で天使のようなプリンセスがウエディングドレス姿で桃色の吐息を吐きながら太股を自分で抱え、恥ずかしそうに身体を振りながらも大股開きでセックスをおねだりしてくるのだ。

「はい、すぐに挿入れます！」

もうショーツを脱がせるのが煩わしくて、蜜で湿っているクロッチを指でずらして猛る逸物を膣口に突き立てる。

「はあああんっ！ あ、ああっ……アキラさん、きて、きてくださいっ……」

こちらもすでに濡れているが、ローズマリーより狭くツルツルとした肉壁がペニスに絡みつく。膣圧は強いがキツすぎるといわけではなくて、まるで膣内が少年の逸物の形を覚え綺麗に包み込み密着してくるような感覚を覚えた。

「は、はい……全部、挿入りましたよ……」

一気に根元までねじ込み股間と彼女の膣口とが密着する。

「……ええ、感じます……アキラさんと一つになってるって……だから、私……今すぐく
幸せです……」

歡喜の涙で瞳を潤ませながらステラは天使のような微笑を浮かべて、ベッドに突いていた両腕に手を絡めてきた。

「僕も、ステラと……こんな可愛いお嫁さんと一つになれて幸せですっ……」
「ああんっ……アキラさあんっ！」

自然と身体が引き寄せられて唇を重ねる。しかしさつきまでのような軽いキスでは我慢できず、どちらからともなく口を開き舌を絡ませ合いお互いの唾液を貪った。

熱い口付けが気分をさらに昂揚させ、少年はお姫様に覆いかぶさるように抱きつき甘い唇を味わいながら腰を振る。

ズツチャ！ ズツチャ！ ズツチャ！

「ンンッ……お、奥に響いてきます……はうん、あああつ……」

牡欲のままに膣内を勃起ペニスでかき回すと姉姫は熱っぽい声で喘いだ。

「ズルいですわ！ お姉様だけ、そんな……わたくしだってアキラの妻ですのにつ！」

姉と少年の間に漂うラブな空気に嫉妬したローズマリーが半身を起こして抗議してくる。できるならすぐに彼女にも挿入れてあげたいが、さつきと違い一度動き出した腰はそう簡単に止められない。

「す、すみません……でもマリーも僕のお嫁さんだって、ちゃんと分かっていますから……」
少年は苦肉の策として上半身だけ妹姫の方へと向けて、おもしろいくらいに不機嫌ですという顔をしている彼女の唇を奪う。同時にウェディングドレスからこぼれている爆乳を驚づかみにして少し強引に揉みしだいた。

「ああん！ んっ……ンン〜っ！ ちゅ、ちゅぶ、アキラったら……いきなりそんなに

強く胸を揉まれたら、ミ、ミルクがっ……はあああんっ!!」

激しいキスの勢いに圧されて王女は横を向いたまま倒れ込み、ベールに包まれた縦巻き
の金髪がベッドに広がる。先ほど搾ったからか乳房は軽く揉んだだけで、乳首からミルク
が溢れてきて乳房の上を伝い落ちシーツを濡らした。

(あ、マリリーのミルクがっ……)

最初は戸惑うばかりだったが、気づけば少年の身体はすっかりお嫁さんたちのミルクの
虜になっている。すぐに美味しそうな高飛車姫のおっぱいにしゃぶりついた。

身を乗り出して両手で乳房を揉みながら交互に左右の乳首を吸う。そうしていると自然
に身体はローズマリィに引き寄せられ、ステラからペニスが抜け落ちた。

「ああっ、抜けちゃいますっ……」

「すみません、すぐ戻ってきますから……」

一度姉姫にキスをしてから、再び高飛車姫の乳房を両手で驚づかみにする。

手のひらに吸い付くような瑞々しい肌に、この極上の弾力。アキラは夢中になって大人
顔負けの爆乳を堪能していたが、ふとあることに気づいた。

「ちゅう……んぐ、ごくっ……あれ？ そういえば最近ちよっと思ってたんですけど、マ
リィのおっぱい大きくなってませんか？」

「そ、それは……んっ、あ、あん！ 確かにブラジャーがキツくて、最近全部一サイズ大
きくしましたわ……」

前からずっしりと重みのある揉み応えだったが、その迫力が最近増してきているように感じたのは気のせいではなかったらしい。

膣奥を突かれる快感に身悶えしながら王女は素直に認めた。

「やっぱりですか!？」

「アキラが毎日毎日揉むから仕方ないではありませんか！」

乳房が大きくなっていることを指摘された妹姫は恥ずかしそうに目を背ける。

これほどのサイズを誇りながらまだまだ成長するということは、いづれクリステイナにも匹敵する爆乳の持ち主になるのだろうか。それにしてもただでさえ大きくて魅力的なおっぱいだったが、自分が揉み育てたとなるとなおさら愛おしい。

「アキラさんっ……私も最近ブラが少しキツいなって思っていましたっ……す、少しですけど……」

少年が嬉々として乳房を揉みミルクを吸いながらローズマリーの膣を堪能していると、今度はステラが身体を起こし必死な表情で腕にしがみついてくる。

「はい、もちろんステラ様のおっぱいだって大好きですよ……」

今度はローズマリーの膣を突きながら姉姫のおっぱいを揉み、ミルクを吸った。

姉妹は向き合うようになりながら身体を寄せ合い、愛しの少年とも少しでも身体を密着させようと首や背中腕を回してくる。

(ああ、幸せすぎて……何かもう、堪んないっ……)

二人の温もりを感じながら腰を叩きつけ、両手でサイズの違う乳房を揉み搾り、キスをしてお姫様たちの身体を味わい尽くす。

「は、あぁっ……もっと、もっとわたくしを感じて欲しいんですの！」

「ダメえ、私もアキラさんにいっぱい愛して欲しいですっ……」

ずっとこうしていたいのが後がつかえているので、そうも言っていられない。それにこんなに気持ちいいステラとローズマリーの膣肉に扱かれては、いくら一度射精したとは言ってもそうそう長く我慢してられない。

「す、すみません……そろそろ出そうですっ……」

そろそろ限界だということを告げると王女たちは自分の膣で精液を受けようと色めき立つ。自ら乳房を揉み搾り、少年の欲情を煽って挿入してもらおうと健気なアピールを繰り返した。

「んふうっ……い、いいですよ、いつでも私の中にお願ひしますっ……」

「でしたら、わたくしにっ……わたくしに出さないと許しませんわよ！」

どちらの期待にも応えてあげたい。

それに今日は外に射精すなんてしたくなかった。

「いきますよ！ な、中に出しますよっ!!」

まるで別の生き物のように蠢くお姫様たちの膣奥に、少年は全身に汗を滲ませながら限界寸前のペニスを打ち込み続ける。

「はいっ、私の中にきてくださいいっ……んひいっ！」

「あ、はああん！ ダメですわ、わたくしにつ……ああああ……ッ！！」

そしてしきりに中出しをおねだりしてくるお嫁さんたちのおっぱいから一際勢いよくミルクが噴き出した。

ぴゆる！　ぴゅーっ、ぷしゅ！　ぴゅ、ぴゅううう……ッ！！

温かいミルクを手のひらに浴びながら少年も絶頂に達する。

「ううっ！　出るっ！　出ますっ！！」

低いうめき声を上げながら挿入していたローズマリーの太股を抱きかかえ、思いっきり逸物をねじ込んだ。

大量の精液が一気に彼女の膣内に流し込まれる。

ドビュウウツ！　ビュ、ビュウツ！！　ドビュビュ——ッ！！

「ひいひいひいひいっ！　出てますわっ！　お、奥にアキラの精液がたくさんっ、たくさんっ……はあああああ……んっ！！」

意識が薄れ視界が霞む中、このまま快楽に身を委ねてしまいたいという衝動を必死に抑えてまだ脈動しているペニスを妹姫の膣から引きずり出した。

そしてアクメに達したローズマリーの喘ぎ声を聞きながら、そのままステラの膣へと射精中の肉勃起を突き挿す。

「あ、ああっ！　熱いのが出ながら、中にいっ……こんな、私っ、はうんッ！！　お腹がヤ



ケドしちやいますうううううっ!!」

——ビュブブッ! ドビュツ、ビュクビュクッ……ビュブウウウッ!!

ステラも絶頂に達した臈をえぐられながら中出しされ、あられもない悲鳴を上げて全身を大きく仰け反らせる。

(はああああ……き、気持ちよすぎるっ……)

あまりに凄まじい射精だったせいで、精液が出終わった後も何度かビクンビクンと空打ちをするほど股間は激しく痙攣を起こしていた。

少し萎えかけたペニスが王女の臈から抜け落ちる。

ドロリ——。

「はあんっ! ぬ、抜けちゃいましたあ……」

「もっとわたくしの中に出して欲しかったのですのに……」

ベッドの上に横たわったウエディングドレス姿のお姫様たちはぐったりとしたまま胸を大きく上下させて荒い呼吸を繰り返していた。

スカートは乱れてシワになり、あられもなく投げ出された両足の間では中出しされた精液が逆流して溢れてきている。そんな思いつきり種付けした証拠を見て男心が満たされていく感覚を覚えた。

「はあ、はあ、はあっ……二人とも、気持ちよかったですよ……」

射精後の心地いい気だるさが全身を包むが、余韻に浸っている場合ではない。

うっとり顔を染めているステラとローズマリーにキスをしてから重たい身体を起こし、自分とのセックスを心待ちにしているもう二人のお嫁さんの方を向く。

「ふふ、やっぱわらわの番ね……でも大丈夫かしら？ 少し休んだ方がいいのではなくて……？」

「いや、大丈夫ですっ！ 今すぐにクリスティナ様とシエリスさんともセックスしたいんですっ……」

ストレートすぎる求愛を受け、年上女たちは驚いたように顔を見合わせた。しかしすぐに嬉しそうに頬を緩ませながら四つんばいで少年の身体に近づいてくる。

「だったらわらわたちが元気にしてあげないといけませんね……ねえ、シエリス？」

「はい。心を込めてご奉仕させていただきます……」

飢えた女豹たちは膝立ちになっているアキラの股間に顔を埋め、半分勢いを失っている逸物をパクリと唾え込んだ。

生温かい吐息が敏感な先端にかかり、背筋がゾクゾクと震える。しかも美女たちはワザとたつぷりと唾液を含ませた舌でペニスをしゃぶるように舐め回してきた。

「う、うはああっ……」

クリスティナが亀頭を、シエリスが肉袋ごと睾丸を口に含み、口の中で器用に舌を動かしてペニスだけでなく股間全体を刺激してくる。王女たちのように取り合うのではなく、二人で協力して少年を感じさせようとしているのだからもう堪らない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!